

# 「戦争の有用性」という視点からの軍事史研究

日本軍事史学会長 高橋久志

アメリカでは、南北戦争・第二次世界大戦・ベトナム戦争等、実際に様々なテーマについて、研究者向けといふよりは一般の歴史愛好家向けの軍事史関係の雑誌がいくつも出ているが、そのうちの一つに *The Quarterly Journal of Military History* と題するものがある。同誌は一九八八年秋季号から発刊され、各論文には常にふんだんに絵や写真を取り入れ、しかも、定期購読者はハードカバー、店頭販売にはソフトカバー版を備えているばかりでなく、そのContributing Editorsには、国立D-Day博物館の設立者で第二次世界大戦史の数々の著作で著名なStephen E. Ambroseをはじめ、David Kahn, John Keegan, Paul Kennedy, Allan R. Millett, Williamson Murray, Dennis Showalter, Ronald H. Spector 等々、多彩な歴史家を執筆陣に擁している。また、軍事史学会会員のTheodore F. Cook教授も夫人と共に名を連ねており、同じEdward Drea博士も、同誌の付録であるReviewの執筆者でもある。

その最新号の二〇〇一年冬季号に、Victor Davis Hansonが執筆した "The Utility of War" (「戦争の有用性」) と題する論文が巻頭論文として掲げてあり、しかも、巻頭には同論文の重要性を指摘する編集長の一文が掲載されている。以下本文において、同論文の内容を詳細に紹介しつつ、その所感を述べることにする。  
まずこの論文の最大の特徴は、何と言つてもそのアップツーデート性にあると言える。今現在、イラクによる大量破壊兵器の所有をめぐる検察とその武装解除について、世界は戦争か平和かの決断を刻一刻と迫られている。  
米英が可及的速やかな武力行使を唱えるのに対し、独仏は共同して激しく抵抗、ロシアや中国も更なる検察継続を主張している。しかも、世界各地では、フセイン政権の打倒・崩壊に向け国連安保理の場を離れ単独でも開戦を辞さない構えを見せている米英両政府を非難する反戦運動の嵐が巻き起こっている。その上、核兵器を既に所有していると判断される北朝鮮が突如対米敵意を募ら

せる一方では、アメリカによる執拗な追跡を逃れている国際テロ組織アルカイーダのウサマ・ビンラーディンが九・一一連続テロ事件を上回る更なるテロ行動による聖戦を呼びかけている。そして、イスラエルでは、パレスチナ人による自爆テロとシャロン政権の強硬な報復措置の結果、血で血を洗う争いは止まるところを知らない。また、開戦となれば、イスラエルはイラクによるミサイル攻撃という一九九一年湾岸戦争の二の舞を覚悟しつつある。しかも、一旦戦端が開かれると核兵器や生化兵器が縦横に飛び交い、人類最悪の大戦争になりかねないといったおどろおどろしいシナリオも、一部ではまことしやかに描かれている。

こうした危機一髪の現在、戦争の有用性を論ずる極めて特異な論文が出たのである。主要国における軍事力や軍事技術の「有効性」を比較検討した研究はこれまであった。しかし、歴史学者が

このような特殊かつ広範な視点から戦争の特質を取り上げたことはかつて殆どなかつたものと記憶するし、見方によつては好戦的とも受け取られかねない危険性を十分に含む議論でもあるからである。

そこで著者が最初に批判するのは、ベトナム戦争終結後三十年間にわたり、アメリカ国内ですっかり大衆文化として定着してしまった反戦のうたい文句である。しかも、「暴力は暴力しか生き出さない」、「戦争をするのでなく、愛し合おう」、「戦争は全く何の解決にもならなかつた」、「平和にチャンスを与えよ」等といつ

た反戦の宣伝文句の裏に、より困難な問題が隠れていると、著者は指摘する。つまり、われわれは過去数世紀にわたり、平和主義は単に単純だけでなく極めて危険ですらあることを示した記録をして残している、と主張するのである。<sup>(3)</sup>

しかも、往々にして理想主義的な反戦平和論は、アメリカ国内の大学でしつかり根をおろしている平和研究や紛争解決論のカリキュラムに色濃く反映されており、今日では軍事史は一般大学ではごくまれにしか教えられていない。そして、戦争が授業で取り上げられるとしても、歴史における普遍的な事象としては教えられない。しかも、国際テロとか大量破壊兵器といった全く新しい脅威に直面している現代では、戦争は「無意味で、不道徳で、時代に逆行し、かつ逆効果」となるものとして教えられている、とのことである。

ところで、「(アメリカの) 大半の大学では、軍事史は未だにむしろ傍流かつ不安定な地位を占めている」、しかも、博士号取得の上で、軍事史を主専攻あるいは副専攻として受け入れている大學はほんの一部でしかない、と二十数年前にRonald H. Spectorは書いたが<sup>(4)</sup>、事情は今となるも余り改善されていないということであろうか。確かにアメリカでは、軍事史研究は現役や退役軍人が当初から長い間独占しており、民間の研究者がなかなか育ちにくかつたこともあろうし、多くの知識人が、軍事史の執筆や教育は戦争の美化や軍国主義思想の流布に繋がりかねないことを恐れ

たこともあつたろう。<sup>⑤</sup>また、最近では歴史学や政治学を専攻する

学生が急速に減りつつあると言われており、そうしたお寒い環境の中で、軍事史研究は殊更窮屈に立たされている、と言えよう。

しかし、こうした風潮に加え、更に様々な要因が重なる、と著者は論じる。つまり、一九七〇年代初めの徴兵制の廃止、そして、その結果として、職業軍人からなる軍隊の設立、更に敵意に満ちた核兵器大国・ソ連の解体は、人々の意識から緊迫した戦争の脅威を取り除いてしまった。他方、国民の生活水準が急速に向上した結果、それまでの豊かな生活を断念してまでして戦争の悲惨さや物質的窮乏並びに犠牲に耐えることが困難となってしまった。しかも、戦争を映像と音で描くテレビ画像は、お茶の間まで容易に進出し、戦争はまるでテレビ・ゲームであるかのようにその「戦術的・戦略的・道徳的文脈」を離れて、単に無意味で邪悪なものとして説明されがちであり、また、未熟なジャーナリストの手によつてそのように簡単に論評されてしまうのである。<sup>⑥</sup>

しかも、著者によると、アメリカの武力行使可否の判断において、これまでに大きな矛盾が生じているとのことである。つまり、反戦活動家や国際主義者は、無辜の民の敵とみなされる腐敗した独裁主義の弱体国家（ハイチ・ソマリア・ボスニア）に対しても、軍事的勝利が容易で犠牲が少なくて済むので一方的な武力行使に積極的である反面、戦争による殺戮や犠牲が甚大と予想される場合、戦いは非道徳的であり、絶対に避けなければならないと考え

ている、と言うのである。

更に、著者のHansonが批判するのは、「新平和主義」の共通項として、戦争は全く稀な現象であり、人間性にとり不自然であるという考え方である。そして、行動科学主義者も、人の遺伝子には好戦的なものは存在していないと主張している。こうした主張は、武力の代わりに国際会議や平和維持活動を好む政治学者や社会学者に「科学的な」裏づけを与えていたが見え、平和こそが自然の状態と思われてしまふ、と著者は強調している。ところが、古代からの人間の歴史を紐解くと、事実は全く逆であり、「歴史の父」ヘロドトスは「（戦争は）息子が父親を葬るよりもむしろ、その逆である時」と語り、プラトンは、「戦争でなく平和こそが人間にとり真の体験の幕間であった」としたのである。<sup>⑦</sup>しかも、アメリカ人は、ベトナム戦争以後少なくとも過去二十年間だけでも時には血なまぐさい戦い（レバノン・パナマ・グレナダ・ペルシャ湾・ボスニア・コソボ・ソマリア）を戦ってきた事實をすっかり忘れてしまっている、とも著者は指摘する。

以上を述べた後で、著者はいよいよ本格的な戦争論へと議論を展開する。まず最初に、戦争の原因としてこれまで考えられてきた人の「無知」と「誤解」を真正面から批判する。例えば、第一次世界大戦の修正主義者は、もしヨーロッパ諸国が会議をもつと重視し、お互いのネットワーク化を図つたならば開戦は避けられ得たと主張している。そこでは、英仏両国のプロシヤの軍国主義

に対する無知に触れる一方で、ドイツが抱いた自國の安全への自然な懸念を、ヨーロッパの平和を乱しかねない一大帝國建設への野心と、彼らが誤解したことが具体例として述べられている。しかし、こうした議論を同じ文脈で推し進めると、一九一八年によしんばドイツが勝利したとしても、戦後のヨーロッパから見ればその勝利は連合国の大勝利とそれほど変わりのないものとなってしまう。

他方著者は、これまでの戦争史の実態から、戦争は現実に対する実際の正当な不満より、むしろそのように知覚した不満から起るものという古典的な解釈の方が眞實に近い、と論じる。そして、ツキジデスの考えに同調する。つまり、戦争は国境・貧困・抑圧などの正当な不満、あるいは物資や戦略的な価値のある不動産を入手する必要性から必然的に起るものではなく、むしろ、これらの原因と同じく頻繁に「恐怖・名誉・私利私欲」から起るものと主張する。そして、国家が必要と知覚するものは、一般の人のように、「虚榮心をみたすものであり、不安定で、不合理、かつ予測不可能なもの」である、と論じる<sup>(5)</sup>。

次に、古代からの世界史の幅広い知識を背景にした著者は、偶発と誤報についても、バランスの取れた思慮深い態度を観かせている。つまり、理論的には偶発と誤報は戦争の引き金とはなるが、誤算は往々にして既に不可避な開戦を早めるだけに過ぎない、と言ふのである。この点、サダメ・フセインがクウェートを侵略し

たのは、それがアメリカの国益とは関係ないと印象を彼に与えてしまつたからであり、ここでも古代人の言葉——「平和を望むなら、戦争に備えよ」との警句を思い浮かべるのである。<sup>(6)</sup>

さて、著者がここまで議論の過程で主として読者に訴えてきたのは、アメリカ国内に一大勢力を張つてゐる平和主義・反戦主義に対し、人類の歩んだ歴史的事実という大きな枠組みからの反論であり、特に戦争原因論に関して強調したかったのは、そうした理想主義の単純で思い込みの激しい態度の危うさであつた。

しかし、著者は折角ここまで順調に説得力豊かにかつ雄弁に議論を進めながら、それ以降は議論の空回りが顕著となつており、極めて残念である。しかも、本論文の中心概念である肝心の「戦争の有用性」が分かりにくくなつてゐるばかりか、外交に失敗して最終的な手段として選択された戦争が果たして所期の目的を無事果たすことが出来るか、あるいは出来たかについて、甚だつきりしない答えとなつてゐる。

まず著者は、戦争の終結の特徴に議論の矛先を向ける。例えば、中東では一九四二年、一九五六年、一九六七年、一九七三年、一九八二年に大きな武力衝突があつたが、戦場では決定的な決着がつかず、外交によつて一時的な平和が短期間にわたり樹立されたのみである。朝鮮戦争の講和も同様であり、一九九一年の湾岸戦争も同じであつて、サダメ・フセインの場合、その十年後には、戦争當時と同じ問題——大量破壊兵器や核兵器の疑惑や新たな侵

略行為の可能性が、大いなる脅威として我々の眼前に立塞がつて  
いる。

そこで著者は、「明白な」軍事的勝利こそが最も緊急かつ重要  
であり、これこそ外交交渉による講和と違い、長期にわたって存  
在している諸問題を即刻解決し得ると論じるのである。そして、  
その決定的な軍事的勝利の成功の好例として掲げてあるのが、第  
二次世界大戦終結時に連合国が枢軸国に要求した「無条件降伏」  
であつた、とする。

しかし、「結局のところ、みじめな降伏を執拗に主張すること  
により、悪の政権が交渉で屈辱を味わわずに済むことを封じ、そ  
の崩壊をもたらしたばかりか、幾多の生命を救うのである。日本  
国民が今日投票権を獲得したのは、祖父たちが沖縄で、また本土  
にあつては米陸軍航空部隊により徹底的に打ち負かされたからで  
ある。しかし、もし我々が硫黄島の戦い以後安易に妥協したなら、  
打撃を受けた帝国政府は再び息を吹き返し、アメリカに対しかつ  
て降伏したことの全くない政権である北朝鮮と同じくらい挑発的  
な態度を今日とつていてることであろう<sup>(1)</sup>」という叙述は、戦争の有  
用性について余りに一方的で単純なコメントであつて、歴史的分  
析にはなつていらない。

しかも、第一次世界大戦はドイツ陸軍の決定的な敗北をもたら  
さず、ドイツ軍はドイツ本国ではなく、フランスで中途半端に降伏  
してしまつた。そこで、後にドイツは戦場で負けたのではなくド

イツ国内の「エダヤ人や共産主義者や裏切り者」により「背後か  
ら刺された」のだとする議論が起きてしまつた、と言うのである。  
これは大雑把で、分析を伴わない単純で印象的な議論であろう。<sup>(2)</sup>  
理論の整合性や一般化を急ぐ余り、まさに歴史家が常に警戒しな  
ければならない過ちに陥つてしまつた感が否めない。

第一に、第一次大戦の終末期における歴史で実際に起こつたこ  
とは無条件降伏でないという事実は動かすことの出来ない事実で  
あり、第二にそうなつた歴史的経緯を論ずることなく、第三に無  
条件降伏だつたら既存の問題が片付き全て終わりよしで、第二次  
世界大戦の主要原因まで除去することが出来たであろうと言いか  
ねない論調である。

なお、ここに至るまで一貫して気になつていたことだが、本論  
文では戦争の「有用性」に関してしつかりとした定義が最初に示  
されることはなかつた。そして、論文の終盤になつて、「侵略を  
阻止し、悪の国家を解体し、何万もの無辜の民に危害を加えよう  
とする指導者を殺害するための軍事力の使用」という定義が、突  
然現れてくるのである。<sup>(3)</sup>

ところが、この定義は一見明快ではあるものの、余りに大まか  
であり、国際政治の現実を全面否定か全面肯定の「善悪」の戦い  
という観点でのみしか捉えようとしない態度に等しい。ここには  
アメリカ民主主義こそが正義であり、他の国家が必ず模倣すべき  
もの、アメリカこそ正義の味方であるといった、これまで多くの

機会を通じて何度も他の諸国から批判されてきた独りよがりのアメリカン・イデオロギーが見え隠れしている。しかも、「侵略」や「悪の国家」、「無辜の民に危害を加える」等といった表現は余りに一面的で、二十世紀以降国益や利害関係の錯綜の度合いをいよいよ深める国際関係を分析する上で、感情論に裏打ちされ易く、これらは有効な分析概念とは言えない。これでは平和主義者や理想主義者に対する堂々としたこれまでの批判が、ますます霞んでしまうのである。

しかも、「悪は説明不可能で永遠の存在である故、卓越した軍事力と道徳上の正義が相備わつてのみ抵抗可能なのである」<sup>[1]</sup>といつた著者の言葉はたとえ古典の教えに従うとは言つても明らかに必要以上の悲観論であり、これまでの国際関係をめぐる学問上の蓄積を自ら放棄するばかりでなく、国際社会における平和構築のためのこれまでの並々ならぬ努力を全て水泡に帰してしまうことにはならないのである。かくして文末にある「人間の本性が変わるものでは偏在する悪を悲観的に受け止め、アメリカを侵略から守つてくれる力を備えていない国連や国際司法裁判所のような集团的な討議の場にその安全を委ねるのではなく、軍事力をもつて自國の安全のために(悪と)対峙する方がより安全な方策のようである」との所感ともなると、軍事万能主義に更に一步近づくばかりかのようである。

我々戦後の日本人による知的冒険は、(1)で紹介した論文にあ

るような「軍事力の有用性」という発想とは程遠い歩みを続けてきた。また、軍事力の有効性の比較研究という視点の発想ですら、なかなか思い浮かばない知的アングルであった。特に、E.H.カーラがこれまでに指摘したように、歴史を常に現在の視点から捉え直すというダイナミズムに富んだ発想と研究態度は、日本人の最も苦手とするところかも知れない。しかも、軍事力や軍事力のあり方等に関してじっくりと思索を重ねること自体、自ら意図して目を塞いできた感が強い。

ましてや、軍事史の研究は、アメリカとは比較にならないほど、未だに一般大学の学問の場で調査や研究、並びに教育の対象として一人前の扱いを受けていない。その点、軍事同盟国として、また、学術研究の分野はもちろんのこと、戦後の日本の歩みにありとあらゆる場面で影を落とし続けている隣国・アメリカにおける軍事史研究の歩みと現在の動向は、常に注目する必要があろう。今回本論文を紹介するに当たって、その内容が不十分かつ不満足と判断されたが、(1)で展開された理論やその発想、並びに実証の方策は、大いに参考になろう。

#### 註

- (1) Victor Davis Hanson, "The Utility of War," *The Quarterly Journal of Military History*, Vol. 15, No. 2 (Winter 2003).

- (a) Allan Millet & Williamson Murray, eds., *Military Effectiveness*, 3 Vols (Boston: Allen & Unwin, 1988).
- (3) Ibid., p. 8.
- (4) Ibid.
- (5) Ronald H. Spector, "Military History and the Academic World," *A Guide to the Study and Use of Military History*, John E. Jessup, Jr. & Robert W. Coakley, eds. (Washington, D.C.: Center of Military History, United States Army, 1979), p. 434.
- (6) Ibid., p. 435.
- (7) Hanson, pp. 9-10.
- (8) Ibid., p. 10.
- (9) Ibid., p. 11.
- (10) Ibid., p. 12.
- (11) Ibid., p. 13.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid., p. 14.
- (14) Ibid.
- (15) Ibid., p. 15.